

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

キリスト教とアボリジニの葬送儀礼： 変化と持続の文化的タクティクス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 窪田, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001575

キリスト教とアボリジニの葬送儀礼 変化と持続の文化的タクティクス

窪田 幸子

広島大学大学院総合科学研究科

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 はじめに | 3 ヨルングの葬儀 |
| 2 ガリウインク・ミッションの歴史 | 3.1 町への集住以前の葬儀 |
| 2.1 ミッションの発展 | 3.2 現代の葬儀 |
| 2.2 適応運動 | 4 考察 — ヨルングの葬儀の変化と持続 |
| 2.3 リバイバル運動 | |

1 はじめに

筆者の調査地は、オーストラリア北部アーネムランドの北東海岸部に位置する。ここに暮らす先住民、アボリジニのヨルングと呼ばれる人々が、恒常的にイギリス系の移民（以下白人とのべる）と接触するようになったのは、今世紀に入ってからのことであった。この地域への入植は、キリスト教ミッションを中心として始まった。それまでの数家族単位で、移動性の高い、狩猟採集中心の彼らの生活は、これ以降大きく変化してきた。現在では、メソディスト派のキリスト教ミッションが1942年に建設した町を基礎として発展してきたガリウインクを中心に、そのまわりに点在する小規模な村々を含め、2000人ほどが定住している。町には、飛行場、道路、住居など基本的設備が整い、食料、日用消費商品などの購入ができ、学校教育、近代医療、各種公共サービスへのアクセスが可能である。ヨルングの人々は近代的住居に暮らし、各機関での雇用労働と、社会福祉から現金収入をえて、必要な物資やサービスを購入する。

ヨルングの人々の生活は、このように市場経済に巻き込まれているが、その一方で、彼ら独自の言語、神話体系、社会組織、儀礼、狩猟採集、慣習を含む伝統的な生活様式が強く維持されている。これは、アーネムランドが1931年に保護区に指定され、白人の自由な入植がなかったことと、この地域にはいったメソディスト派ミッションのアボリジニの文化を重視する方針であったことがその背景にある。生活の基礎単位は父系のクランであり、これは、神話、聖地などを所有する単位であるとともに、外婚単位であり、彼らの精神的支柱である。ヨルング地域には全部で50ほどのクランがあるが、儀礼では各クランの神話の内容が、歌い踊られる。それぞれのクランの神話は、身体装飾や彫刻、絵画でもあらわされる。つまり、ヨルングは、相対的にいってオーストラリアのなかでも伝統的文化要素を色濃く残す人々といえる。本論で取り上げる葬儀は、こう

したクランをめぐる彼ら独自の概念や慣習が顕在化する場である。筆者は以前に同様の視座から、儀礼と神話というアボリジニの伝統文化に見られるキリスト教の影響を検討した(窪田 2002a)。そこでは、キリスト教的要素を、社会の歴史的变化の文脈に当てはめて考えたが、その後の調査を通して特に葬儀にみられる多様性については、さらに考察と分析が必要と考えるようになった。

アボリジニの人々のいわゆる伝統的な文化実践は、外来の要素によって大きく変化し続けてきた。それは「消滅の語り」と表現されるような、変化によって伝統的なものが失われていくものとして語られ、そのような視線が注がれてきた。彼らの宗教的世界観が明確に現れる葬儀に外来の要素が入り込んできていることは、かれらの文化が侵食されていることであり、「本来の」かれらの文化が失われていっていると一般的に理解される。しかし、そこには、実は彼らの強固な枠組みとみなしうるものをみだすことができる。ヨルングの現在の葬儀の事例を示し、その持続と変化をめぐり、彼らの主体的な文化的タクティクスを考察してみよう。

2 ガリウインク・ミッションの歴史

2.1 ミッションの発展

オーストラリアにおいて各キリスト教会が、大陸北部地域に布教のためのミッション展開を本格的に始めるのは、20世紀に入ってからのことであった。当時アボリジニは絶滅しつつあると考えられており、南部のアボリジニはもはや救いようのない、崩壊した民族と理解されていた。その一方で、北部には、自然状態の、野蛮で、攻撃的な、しかし、それゆえまだ文明に毒されておらず、救うことが可能な「本当の」アボリジニがいると考えられていた。それぞれの教会は彼らを救うべく活動を繰り返していった。1912年にはキリスト教会宗派間で北部地域の区域割りがおこなわれ、このときの話し合いに基づいて、著者の調査地域である東アーネムランドにはメソヂスト派のミッション(Methodist Overseas Mission)が宣教をはじめることになった(Harris 1990)。

筆者は以前、別稿で、オーストラリアのキリスト教ミッションとアボリジニの歴史的関係について論じたが(窪田 2000)、そこで述べたように20世紀初頭までのオーストラリアにおけるミッション経営とその後では、アボリジニの扱いに大きな差があった。特にそのなかでも筆者の調査地でのミッションは、アボリジニ文化に親和的な方針をとっており、それは独自なものであったといえる。20世紀はじめまでのオーストラリアでは、基本的にはアボリジニは野蛮で下等な民族であるとする見方が優勢であった。そんななかで、ミッションの活動の中心は、ハーフ・カーストとよばれる白人とアボリジニとの混血の子どもを寄宿舎で教育することと、アボリジニの管理におかれた。管理とは

具体的には、アボリジニをミッションが運営する居留区にすまわせ、そこで農耕などの労働をさせることで、アボリジニの生活は、アボリジニ監督長官（Superintendent）に指名されたミッションのスタッフによって全てこまかに決められ、自由な行動は許されなかった。しかし北部では事情が違っていた。1931年に設定されたアーネムランド保護区は、北部の「伝統的な」アボリジニを保護するために、彼らの居住地である約10万平方キロメートルの広大な地域を指定し、アボリジニの緩やかな同化を促そうとするものであった。そこでのアボリジニの監督はミッションに任された。アーネムランド地域のミッションの多くは強圧的な方針をとらず、アボリジニ文化に一定の理解を求めた。アーネムランドのアボリジニの多くにとって、入植者とは牧場労働者でも、鉱山労働者でもなく、親切で友好的なミッションの人々であった。ヨルング地域にもこの時期にミッションによって町が建設された。

筆者の調査地の中心であるガリウインクは、1942年に建設された。それまでにすでに、メソディスト派ミッションは、1916年にゴルバーン、1923年にミリンギンビ、1935年にイルカラのそれぞれの町をアーネムランド地域に建設していた。1941年にはじまった太平洋戦争のために、ミリンギンビに空軍の基地がつくられた。ガリウインクの町は、日本軍による空爆の可能性を恐れて、東隣のこの地にミリンギンビの代替地として建設されることになったものである。ミリンギンビのミッション・スタッフであったシェパードソン夫妻が、ミリンギンビで使っていた製材のための機械をはじめとする様々な設備機材を船に積み込み、ヨルングの3家族と一緒にガリウインクにやってきた。このとき、50人ほどのヨルングがすでに集まっていたという（McKenzie 1976）。シェパードソン夫妻がそれまでにミリンギンビのヨルングの人々の信頼を得ていたこともあって、この町へのヨルングの人々の集住はおおむねスムーズであったといわれる（Keen 1994）。ガリウインクでは移動の直後からヨルングたちの協力を得て、住居、教会、製材所、プランテーション、学校などが次々と建設されていった。ヨルングたちもそのまわりに小屋をつくり住むようになった。このメソディスト派ミッションは、それ以前の19世紀的な、アボリジニを強圧的に教化教育する事を目的とした南部の多くのミッションとは大きく異なっていた（Dewar 1995）。ここでは子供たちを同化させるための教育を目的として親から引き離すことはなかったし、儀礼や狩猟採集を禁止することもなかった。スタッフのなかには人類学の教育を受けた者もあり、ヨルングの言語を積極的に学ぼうとする者も多かった。つまり、多くのミッション・スタッフがアボリジニ文化に親和的で、彼らを理解しようという態度が明確にあったのである。そうした行動を基礎として、ヨルングとガリウインクのミッション・スタッフとの関係は友好的だったといえる（窪田 2000）。

戦争が終わり1950年代にはいり、疎開していた人々が南部から戻るとガリウインクは発展していった。スタッフの人数が増え、スタッフ会議が開始され、ヨルング語の語

学クラスも始まった。飛行機での移動は日常化し、機動力によって物資の輸送も容易に活発になった。学校も規模が拡大し、生徒は90人ほどに、白人の教員が二人に増え、新しい校舎も建設された。新しく漁業会社も設立された。ガリウィンクには、1959年末の段階で約20人 (McKenzie 1976)、1968年には35人 (Bos 1988a) のミッション・スタッフがいた。

東アーネムランドではいずれのミッションの町でも、周辺地域にいたアボリジニの多くが比較的スムーズに定住するようになっていったといわれる。労働をしたアボリジニには小麦粉やタバコで給料が支払われ、そのことが人々と町の距離を縮めた。ミッションのスタッフに対する好奇心も、多くのアボリジニの人々を町に惹きつける要因になった。しかし、全く問題がなかったわけではない。例えばミリンギンビでは初期に、ミッションのスタッフが一夫多妻をやめさせようとして、ムチで打ったために、アボリジニが憤慨し、伝道師を殺そうとした事件が記録されている。ガリウィンクでもクラン間での紛争による流血の騒ぎが後をたたず、スタッフの人々は頭を痛めたという。しかし、全体的な流れとしてみると、アーネムランドのメソディスト・ミッションは、アボリジニの文化に理解と彼らに歩み寄る姿勢をはっきり示し、アボリジニ側の受け入れも良好だったといえてよい。

戦後になってアボリジニを取り巻く状況は大きく変化していく。それは、アボリジニを強制同化させるのではなく、彼らの福祉を考え保護するという方向への国家の大きな政策転換であった。オーストラリア全土で、ミッションの方針はそれ以前に比べてよりアボリジニ文化に親和性が高いものになった。同化主義的でありつづけてはいるものの、戦前まではむしろ当然とされていたミッションでの英語の強制、一夫多妻の禁止、伝統儀礼の禁止、子どもを寄宿舎へ入れる、などにみられるような西洋白人社会の価値観を強力に押し進めるような方策は見られなくなっていき、時代は同化政策から自立自営政策 (self-determination policy) へと確実に動いていた。この時期にガリウィンクでは、次節の2.2で述べるように、一つ目のキリスト教にかかわる事件が起きている。

1960年代から1970年代、ガリウィンクでは、学校、診療所、材木用樹木のプランテーション、製材所、農場、水産工場、マーケット、アートセンター、発電所、上下水道部、建築部、縫製所などがあった。ヨルングの人々は、ミッション・スタッフに協力して町の運営にあたっていた。ヨルングの子どもたちはミッションが運営する学校に通い、女たちはミッションのスタッフの家で手伝いをしながら家事を学び、男たちは農園や製材所で労働するという、教会を中心とした調和のとれた生活がおくられていた。そして毎週日曜には、多くのヨルングの人々が晴れ着に着替えて教会に通っていたという (Fidock 1982)。筆者は別稿で、このような友好的な関係がヨルングとミッション・スタッフとの間に築かれたことを基礎として、宗主国イギリスのビクトリア朝時代の風潮につよく影響された後者の行動規範や考え方が、ヨルングの家族生活、結婚、労働など

にかかわるジェンダー観に、大きな影響を与えたことを論じている（窪田 2002b）。

1967年の国民投票により、国勢調査にアボリジニを含めるための憲法改正が決定され、これによってアボリジニにかかわる政策は連邦政府が責任をもつこととなった。この時期、アボリジニは他の住民と平等の権利を手にする事となったのである。1972年、ウットラム労働党政権下において、アボリジニの自立自営が連邦政府の公式の方針となった。これは、アボリジニ自身が主体性をもち、自分たちの未来を自ら決定し、行動することを目指すものであった。メソヂスト派ミッションはこうした流れのなかで、アボリジニによる自主運営をめざした行動を開始していった。アボリジニによる町議会を構成し、ミッションは町の運営から手を引き、アボリジニによる運営へと移行してゆくことがめざされたのである。アボリジニは、最低賃金法、社会福祉制度などにより直接に現金収入を得るようになり、大きな社会経済的変化を経験することになった。

1972-1975年の労働党政権のもとで、自立自営政策は具体化されていった。土地権についての議論が最初に起きたのもこの時期である。こうして1975年、公式に町の運営権は、ミッションから町議会へと移行された（Bos 1988a）。1976年には先住民土地権法（北部準州）（Aboriginal Land Rights (NT) Act）が成立し、それまで保護区であったアーネムランドはアボリジニの土地と認められた。経済的にも政府からの補助金が増加し、急速に自立自営へと動いていった時期といえる。この時期はアボリジニの権利を拡大し、認める施策が次々ととられていったのであるが、一方で、その変化は急激すぎるとも感じられていたという。ミッションのスタッフが去ったために町は混乱した。アボリジニの多くが目標をうしなった状態となり、教会への興味も減退した。お金を直接手にするようになった人々は、酒を入手し、酔って喧嘩が頻発するという混乱状況にあったことが記録されている（Blacket 1997）。二つ目のキリスト教にかかわる事件がガリウイックで起きたのはこの時期である。これについてもまた後の節、2.3で詳述する。

筆者がガリウイックに最初に調査にはいった1985年には、町の運営はヨルングの人々が決定権をもっていた。白人による援助をうけながら、ヨルングの人々自身による自治が行われていた。学校は北部準州の教育局の管轄となっており、病院も北部準州の厚生局の管轄であり、店は北部オーストラリアにいくつかの店をもつ生協の運営で、ミッションによる運営が続いている機関はなくなっていた。かつてあったプランテーション農場は放棄され、縫製所や製材所、水産会社などはなくなっていた。町に居住し、働いている白人はほとんどが政府によって雇われた者たちであり、メソヂスト派は、当時オーストラリア統一教会（Uniting Church）となっていたが、その関係者は、MAF（Mission Aviation Fellowship）という軽飛行機会社のパイロットたちと、教会の援助のもと聖書翻訳をおこなっている女性一人だけであった。日曜礼拝に通う人の数も少なく、表面的には町の日常生活ではキリスト教の重要度は低くなっているように

見えた。

2.2 適応運動

1957年、ガリウインクでは、適応運動（Adjustment movement）と呼ばれる事件が起きた。この地域の中心的なクランの代表者があつまり、ランガと呼ばれる、それまで成人儀礼を経た成人男子にしか公開されることのなかった各クランの秘密の聖なる彫刻を、夜のうちに教会の近くにコンクリートで固めた土台の上に建立し、全ての人々に公開したのであった。この事件は、1930年代からミッションの町の建設、運営に積極的に協力してきた数人のヨルング男性が中心になり、クランの代表者に働きかけ、説得して実現したものであった。この男性たちは、いずれも町でも力のある年長者とみられていた。すべてのクランの人々を説得するのは大変だったはずだが、中心となった男性、バタンガらの指導力と信頼の強さを示す出来事といえる。

彼らは、これを「契約」と呼んだ。ランガを公開し、自分たちが秘密としてきた知識を公開することによって、キリスト教を受け入れ、古い伝統的なやり方を捨てる、と宣言したのである。ミッションの町では、当時クラン間の争いが絶えず、しばしば流血事件がおきたことが記録されているが、バタンガらは、ランガを秘密としていたためにこうした争いが起きてきたとした。そして、その秘密を公開することで、キリスト教を受け入れたことを示せば、神がわれわれを正しい道に導いてくれる、と考えたのである。ランガはそれまで成人男性の秘密の儀礼でのみ限られたメンバーの間で秘匿され、女性や子供たちが目にするると病気になり、時には死にいたるとされ、厳禁されてきたものだった。朝、ランガが公開されたのを見て、女性たちはパニックを起こし、気絶する者が続出し、町は大騒ぎになったという。

バートンは、ランガの公開に踏み切ったヨルング男性たちについて、キリスト教的な価値観と伝統的な価値観のあいだで板挟みになる状況におかれていた事を指摘し、そのなかで行われた決断だったと分析している。そして、米豪共同調査団による秘密の儀礼の公開がこの事件の直接の引き金となったことも述べている。この事件に先立って、米豪共同調査団がこの地域で秘密の儀礼を撮影した映画を、ガリウインクで上映した。これを見た人々は、秘密が公開されてしまったことにショックを受けたのであった（Berndt 1962）。一方、ハリスはこの事件の背景には、戦争による影響があるとのべている。戦争によって、ミリンギンビには空軍キャンプが作られたのをはじめ、ダーウィンにも多くの軍事施設がつくられ、多くのアボリジニがこうしたところで軍属として働いた。アボリジニにとっては初めての雇用という経験であった。ヨルングの人々は、はじめてミッション以外の白人と接した。そして最新の戦闘用機器、機銃掃射や爆弾によって、白人たちの圧倒的な力の強さを経験したのである。そのことがキリスト教を積極的にうけ入れようという態度があらわれたことの背景にあるとしている（Harris

1990)。また杉藤は、この動きは、秘密のものであったランガを公開することで白人のもたらず財を獲得しようとした「千年王国」的な動きだったと分析している（杉藤1990）。

この事件は、こうしたいくつかの社会的背景が複合的に結びついて起きた事件であったと考えられ、また、当時のガリウインクのヨルングたちが、ミッションを好意的に受けとめており、両者の間に良好な関係があったゆえに積極的にキリスト教に象徴される白人主流社会の文化に近づこうとした動きであったとみることはできるだろう。

2.3 リバイバル運動

キリスト教にかかわって歴史的に重要な二つ目の事件が、1979年におきたいわゆる「リバイバル運動」である。これは、オーストラリアでは全国的にも有名なキリスト教の再生運動である。以下に詳しく述べるように、この運動はヨルングの人々が中心となっておこったもので、白人やミッションの主導によるものではなかった。ガリウインクで始まったキリスト教再生運動は、その後各地に飛び火し、やがて全国的なキリスト教のリバイバル運動となっていき、その動きは黒い十字軍（Black Crusader）と名付けられた（Bos 1988b）。

1970年代前半、ガリウインクでは奇跡のような出来事が頻発し始めた。例えば、ある男は自分の夢の通りに、海でオーストラリア大陸のかたちをした石を発見した。それは、彼によればオーストラリアの社会が近い将来、白人とヨルングの区別のない一つのものにまとまることを象徴するものであった。また1974年には、町の中心人物の一人の男性が病気になり、息もできないほどになり、肺気腫と診断された。彼は、診療所で呼吸困難に陥り、危篤の状態になった。家族や友人がベッドの周りに集まり、祈り、過去の罪を告白するようにとすすめた。彼は英語で「ブッシュの神をあがめた、浜辺の神をあがめた、わたしは自分の罪を告白します」と神に祈ったという。そうすると、その男は息ができるようになり、元気になったという。また、同じ頃、別の男は、夜、家が大きく震えだし、神がやってきたことを実感したと報告している（Blacket 1997）。このように、祈りによる病気の治癒などの奇跡や、特殊な光や振動による神の存在の実感、異言をかたる人々など、ガリウインクでは、超常的な現象が続いたといわれる。

1979年3月、また別の男が夢を見る。その夢は、火事の夢で、島の北部から大きな野火がおこり、ガリウインクに向かって広がっていった。火は、その男に向かってどんどんと近づいてくる。そして、ついに男は焼かれ、最後には全てが焼かれてしまう。彼は、その火に神の存在を感じる。すべてが焼け野原になったあとには、植物があつという間に芽吹き、新しい緑と花があふれ、エデンの園ようになる。彼は、この夢は神があらわれ全てを変え、世界が変わるということの予兆だと人々に語ったという。同じ日に、彼だけではなく多くの人が夢のなかで神の存在を感じたと報告した。こうして、町

の人々のあいだに驚きが広がり、奇跡を待ち望む雰囲気が高まっていったのだという (Blacket 1997)。

ガリウインクには当時すでにジニイニというヨルングの牧師がいた。ジニイニはダーウィンのアボリジニのための神学校ヌンガリナ・カレッジ、さらにニューギニアの神学校で学び、この地域ではじめてのヨルング人牧師として1976年にガリウインクにもどっていた (Sheperdson 1981)。毎夜のようにキリスト教の集会在ジニイニの家を中心に行われるようになった。ある夜、ジニイニの家で集まっていた人々全員が、家全体が振動とともに神の魂が人々の心にはいってくるのを感じるという奇跡の体験を共有し、陶然となる (Blacket 1997)。

町では、キリスト教集会の回数が増え、教会礼拝への参加人数が急増した。集会はほぼ毎晩行われ、それまで日曜日の教会には20人も集まれば良いところだったが、数百人の人が毎晩のように集まるようになった。

5月には、福音伝道主義のカリスマティックなキリスト教の唱道者であるアームストロング牧師 (Rev Dan Armstrong) がキャンベラからやってきて、ガリウインクで集会をおこなった。この牧師は、マイクを使い、原理主義的で陶酔的な説教を、大きな声で煽るような調子で聴衆に語った。集会では音楽を多用し、全員が音楽にあわせて踊る。祈りは陶酔を伴うようなものであった。この牧師の滞在中にガリウインクでは、200人がキリスト教に帰依したという。そしてこの時以降、キリスト教集会でマイクを用いることが一般的となった。これ以外にも、ペンテコスタル派などの他のキリスト教の影響も受けて、独特の集会のかたちが成立したと考えるのが妥当だろう。例えば、1980年の感謝祭週間に、ダーウィンから福音伝道主義のアボリジニの家族が訪れたときに行った、魂を救うという儀礼行為も、取り入れられたという。これは、集会のさいに膝まずいて祈りを捧げる人の額に手をおき、その祈りに答えてあげるというものである。そのうちに祈っている人は興奮し、トランスのような状態になる。それをそっと支えて地面に横たえる。このやり方もまた、すぐにヨルングたちにとりいれられ儀礼の一部として一般化した (Bos 1988a)。集会は決まったパターンで行われる。ボスはそのメソヂスト派の集会とアボリジニの伝統的な儀礼集会のスタイルとの共通性を指摘している。現在の集会のかたちはこのように、多様な在来と外来の要素を取り込む形で成立してきたと考えられる (Bos 1988b)。

こうして、キリスト教のリバイバル運動は盛り上がり、ガリウインクのヨルングたちは各地のアボリジニコミュニティをおとずれ運動をひろげた。集会が頻繁に各地でひらかれ、リバイバル運動は、アーネムランドはいうにおよばず、オーストラリアの他地域のアボリジニの町へ広がっていった。そして、数年が過ぎ、運動自体は次第に鎮静化していった。

大きなリバイバル運動の中心であったガリウインクではあったが、運動が鎮静したあ

との1985年に始めてこの地を訪れた筆者には、キリスト教の要素は表面に見えてはこず、むしろ、狩猟採集活動、親族関係の知識、儀礼、神話などいわゆる「伝統」の色濃い世界に見えた。しかし、調査が長くなるにつれ、彼らの精神的支柱である儀礼にキリスト教的要素が入り込んでいることに気づくことになった。そしてそれは単純にキリスト教化していつている、というのではなく、多様な様相がみられた。以下に葬儀に見られる変化を具体的に考察することにしよう。

3 ヨルングの葬儀

3.1 町への集住以前の葬儀

ミッションの町に集住するようになる以前、ヨルングの葬儀は非常に長い時間をかけて行われるものであった。葬儀は、地域およびクランによってバリエーションがあったというが、インフォーマントによるとこの地域では以下のように行われたという。分散して狩猟採集生活を基調とする生活をおくっていたとはいえ、ヨルングは季節的な、かなり長期間定住する村と呼べるような単位をつくっており、そんな村で死者が出ると、まず人々は神話のサイクルを歌い、死者を安置する高床の小屋をつくる。そこに遺体を安置し、一晚歌を歌うと遺体をそのままにして、村人は村を離れた。そして、数カ月後、遺族は村に戻り、死者の骨を回収し、樹皮に包み、それを持って再び村を離れる。死者がでた村は数年の間放棄されたり、ほかの親族が使ったり、また、何年後かに元の家族が戻ってくる場合もあった。このとき、高床に放置するのではなく、遺体をいったん埋め数ヶ月後に掘り起こし骨を回収する、という方法をとる地域もあった（Warnar 1969 (1958)）。こうして、遺族は骨の包みを持ち歩き続ける。骨を持ち歩くのは、死者の妻か母親（類別的母亲を含む）で、彼女らは髪を剃り、身体に白オーカーを塗り、食物禁忌をとまなう喪に服した。その食物禁忌は大変厳しいもので、死者の母である場合、口にできるものは本当にわずかであったといわれる。こうしているあいだ、葬儀についての話し合いがおこなわれた。この話し合いは、死者の死因、葬儀の執り行い方を中心に、細かなことについても議論をしてくめられた。時には、それは数年を要することもあった。こうしてすべてが決まってから、葬儀が執り行われた。葬儀には人々が集まり、何日にもわたって歌を歌い、踊った。最終的には、骨をホロログと呼ばれる内部をくり抜いた丸太の棺に収め、これを葬儀が行なわれた村のはずれに立て、葬儀は終了したこうした儀礼は、ミッションが町を設立して以降も1960年代ぐらいまで、町から離れた地域では行われていた。

3.2 現代の葬儀

調査地では、葬儀は現在も人々の大きな関心事である。彼らの葬儀についてやす時間と

労力は驚くほど大きい。多数の人が集まり、長い時間と多大な費用をかけ、盛大に行われる。葬儀に人が多数参加することが重要であり、長い時間をともに過ごすことも求められる。葬儀中、そして終了後もしばらくの間、遺族のそばで生活することも歓迎される。葬儀が行われていると町の人々は必ず顔を出さなくてはならない。無関心な態度は歓迎されず、葬儀場に集まる人が少ない場合は、町の拡声器であつまるようにという呼びかけがされる。ほとんどすべての人が何らかの親族関係で結ばれているこの地域では、「親族」である死者とその家族のために、ガリウイंक以外の遠くの地域からも多数の人がやってきて葬儀に参加する。遺族が、踊りや人の集まりが十分でないとして、葬儀期間を延長することも稀ではない。葬儀は3日で済ませることが望ましい、というミッション時代の原則は今も口にされるが、実際には短くても5日は葬儀が続き、近年ではさらに延長される傾向がみられる。葬儀の間、多くの日常的な活動は停滞する。学校は短縮授業になったり、最終日には休校になったりするのが通例である。仕事を休むヨルンクも多い。店も、短縮営業になり、町の全ての機関が何らかの形で喪を表す。ガリウイंकの町で、これまでの滞在期間中、葬儀に出会わなかったことの方がめずらしい。幼児死亡率が高く、平均余命が短いこともその大きな原因だろうが、一つ一つの葬儀に時間をかけるため、葬儀に出会うが増えるという側面もあるといえる。そして、葬儀の終了後、遺族は住居をほかに移す。その期間は通常数年間におよぶ。以下に典型的な現在の葬儀の流れを述べよう。

① 準備過程

現在のヨルンクの人々は、病気になると都市の病院に輸送される。したがって、現在の多くの死は都市の病院で発生する。都市の病院で誰かが死亡すると、連絡は長老たちのところに届けられ、当初、女や子供たちには知らされない。

町の拡声器で、「聞く ngaama 儀礼」が行われるので、所定の場所に集まるようにというアナウンスがされる。「聞く儀礼」とは、死者が出たことを公にする儀礼である。この儀礼があるということは、誰かが死んだことを意味する。また、人々は町に暮らすほかの人々についての情報を細かに知っているので、誰が死んだのかはおそらく多くの人々が了解しているはずである。それでも女性たちは、全く何事もなく、何も知らないかのように、所定の場所に集まる。そして、座って待っている女性たちのところへ、長老と男たちが白オーカーで顔と身体をぬり、拍子木とデジャリドゥーで調子をとるヨルンクの歌を歌い、踊りながら入場し、誰が死んだのかを告げる。このとき、個人名ではなく、親族呼称の関係名称で死者を告げる。ヨルンク社会では死者の名は禁忌となるためである。女たちは死者を告げられた途端に、死者との関係名称を泣き叫び、身体を強く地面に何度もたたきつけ、石や刃物で自分の体を殴りつけ、激しく悲しみをあらわす。子供たちは驚いて泣き出し、自傷行為をやめさせようとする人々とのみ合いが起

こり、場は混乱を極める。

この儀礼によって死は公のものとなり、人々は葬儀の準備を開始する。議論して決まなくてはいけないことは数多く、準備には長い時間がかけられる。都市の病院で死亡した場合、遺体は、そのまま病院の遺体保管室に留め置かれる。そうでなく、ガリウインクの町で死亡した場合は、遺体は家から車にのせ空港へ運ばれる。車はヨルングの歌と踊り、そして道端に小さな火をおこしながら先導する人々につづいて、飛行場まですみ、遺体はそこから軽飛行機で都市の病院に送られ、遺体保管室にいられる。

こうして遺体を病院の遺体保管室にとどめておいて、ガリウインクでは、葬儀の準備が始まる。準備は、まず死因についての議論から始まる。彼らはほとんどの死を自然死とは考えず、まず黒呪術の可能性を吟味する。そこで、死因を含め、生前の死者の行動を人々は細かく振り返り、分析し、議論する。死者が死ぬ直前の行動について、それぞれが覚えていることを話すのだが、特に不思議な行動、例えば、なぜ彼（彼女）はあの日あそこで右に曲がったのか、なぜ二回手をふったのか……、などのことが細かく吟味され、黒呪術の可能性が議論になる。実際にはこうした議論によって黒呪術があったのかどうかや、黒呪術をかけた人間が特定されることはほとんどない。それでも人々はこうした議論を重視し、長い時間を費やす。

それに続いて、葬儀の場所、葬儀のリーダー、葬儀での人々の役割などが細かく議論され続ける。特に葬儀の場所、埋葬地については、常に大きな議論が巻き起こる。それぞれの親族が、おのおのの理由によって異なる葬儀の場所を主張することが普通であり、しばしばその意見は対立する。そして、儀礼の間に棺をおさめる喪がり屋、棺などについてもどのようなものにするのか、そして、それらをなんとという「名」で呼ぶのかについても決めなくてはならない。ヨルングの親族組織では、クラン間関係が重要である。特に母クランと子クランの関係、母方祖父母クランと孫クランの間は重要な関係である。それぞれは、ヨトーインディ（Yothu-Ngindi：子—母）関係、マリーグッタラ（Maari-Gutharra：母方祖父母—孫）関係とよばれ、日常的にも重要な社会関係であり、こうした儀礼の場面で特に強調される。葬儀においては、死者とヨトーインディ関係にあるクラン、マリーグッタラ関係にあるクランは中心にかかわらなくてはならず、発言力もある。それぞれのクランの誰が葬儀でどの役割を果たすかについても具体的に決められる。クランのどの絵を棺に納めるのか、誰がそれを描くのか、儀礼場につくるモル（molok：砂で作るクランのデザイン）は何にするのかも議論した上で、決める。

この際、死者の母クラン、祖母クラン、というのは一つとは限らないことがしばしば問題になる。一夫多妻制のこの社会では、婚姻を結ぶことのできるクランは複数ある。したがって、死者のクランにとっての母クラン、祖母クランも複数ある。もちろん、もっとも正統とされるクランは死者との血縁の近さからおのずと決まるが、複数のクランが葬儀に中心にかかわることを主張することは可能で、少なくとも儀礼の行い方、

葬儀の場所、埋葬の場所に異論をさしはさむことができる。どのクランがどの程度、中心的にかかわるかは場合によって異なってくることになる。こうして議論が繰り返され、一応の合意が図られるわけだが、なんらかの不満が一部のクランに残っている場合が多い。こうした背景があるため葬儀ではかならずといっていいほど、ことあるごとにクラン間の緊張関係が表面化し、議論が蒸し返されるのである。

このような複雑な事情があるため、準備のための一連の議論には一月以上を要することも希ではない。ヨルングの人々の議論は、多数決で決められることはなく、全員が納得するまで発言や意見の応酬が続けられるからである。こうして全てのことが決まると、町の人々、遠くの親戚などに葬儀の期日、場所、儀礼のリーダーなどの詳細が伝えられる。

② 葬儀場

関係者が納得し、必要事項が決定されると、儀礼場が整えられ、喪がり屋がつくられ、儀礼に必要な彫刻や絵画の準備が始まる。

一般的に葬儀場は、死者の家のそばに作られる。家の前や近くの空間に、海岸から砂を大量に運び込み、その場所を葬儀場とする。ヨルングの踊りには、強く地面を足で踏みつけ、地面の砂を巻き上げるようにする踊りが多い。また、モルもつくらなくてはならない。そうした事情で、儀礼場には必ず砂が運び込まれる。そしてこの葬儀場のはしには遺体をおさめる喪がり屋が建てられる。まれに死者がつかっていた家の一室がそのまま喪がり屋とされることがあるが、一般的には葬儀のために小屋が特別につくられる。喪がり屋は、ふつう3～5メートル四方ほどの大きさの小屋で、四方に柱を立て、壁面と屋根に葉のついたユーカリの枝をかぶせ、入り口にはカーテンをかける。壁面や屋根は、ユーカリの枝以外に樹皮やベニヤ板を使うこともあるが、近年ではトタンやビニールシートを使って覆うことが増えてきた。時にはもっと堅牢な金属を用いてつくられることもある。いずれの場合も、入り口には聖書の一節がヨルング語で刺繍されたり、十字架やハトなどの図案がアップリケされたりした布がつるされる。この布は使い回しをする場合も、新しく作られる場合もある。内部には莫塵をひき、ベッドをおき、そこに棺が安置される。棺は布でつつまれ、造花で飾られ、その上に鳥の羽で飾られた儀礼用のカゴがおかれる。喪がり屋の内壁も布や造花、キリストやマリアの絵画、時には死者や死者の親族の写真などできれいに飾り付けられる。葬儀での踊りはこの喪がり屋を中心にして、布をかけた入り口に向かうようにして踊られる。

葬儀場の周りにはテントがたくさん張られる。遠方の人、死者との関係の近い人は、葬儀場のそばのテントで、葬儀の期間中寝泊りするのである。

③ 葬儀の過程

葬儀開始の日になると、遺体は西洋式の棺に収められ、軽飛行機で町に送られてくる。飛行場には人々が白オーカーで身体全体をぬって集まり、ヨルングの歌と踊りとともに軽飛行機に乗った死者を迎える。男たちが拍子木とデジャリドゥーの伴奏で歌い、音楽を演奏し、踊る輪のなかに、棺が軽飛行機から下ろされ、女性たちは悲しみの声をあげる。そして棺は車にのせられ、葬儀場へと、歌と踊りに先導されて運ばれる。女たちは、踊りながら、葬列につづく。棺は喪がり屋に安置される。

棺が到着すると、葬儀が始まる。葬儀は5日間程度が普通だが、時には1週間をゆうに超えることもある。葬儀の長さは、遺族の意向、葬儀のリーダーの意向によって決まる。葬儀期間中、通常は朝10時頃から男たちがデジャリドゥーと拍子木で、ヨルングの歌を歌い始める。歌が聞こえ始めると、次第に町の人々も、葬儀場に集まりはじめる。午後になると歌にあわせての踊りがはじまり、3時か4時ごろから本格的に行われるようになる。踊りは、クランごとにおどられ、中心的に儀礼を行うクランのほかにも、死者と関係の深い複数のクランが入れ替わり立ち代り、時には同時に別々の歌と踊りを展開する。踊りと歌は各クランから死者のクランへの贈り物と考えられている。クランの秘密とされるような「大きな」踊りもいくつか、死者への特別な弔意として踊られる場合もある。全体を差配するのは、儀礼のリーダーである。各場面で、葬儀への不満が噴出する可能性はつねにあり、クラン間の緊張関係が表面化することも多い。こうしたことを穏やかにささめるのもリーダーの役割である。踊りの一方で、人々はそれぞれクランごと、親族関係ごとの集団をつかって喪がり屋に入り、弔間を行う。女性たちの弔間では、また身体を地面に打ちつける激しい嘆きが表現される。踊りと弔間は通常夕方暗くなるまで続けられる。

夕方になると人々は一旦家に戻り、儀礼場はきれいに片づけられ、掃き清められる。そして人々は8時か9時頃から再びあつまりはじめる。夜の集まりは、葬儀場を電気で照らしておこなわれるが、これはキリスト教的集会となる場合が多い。聖書の朗読、祈り、ゴスペルの合唱、ゴスペルに合わせた振りつきの踊り、そして祈りと陶酔的な礼拝が行われる。これは、前章で述べたリバイバル運動以降に一般的に行われるようになったキリスト教集会と同様の形式である。集会には、ギターやキーボード、テープレコーダー、アンプなどがつかわれる。集会は毎夜、遅くまで続けられる。このように昼は、いわゆる伝統的な歌と踊り、夜はキリスト教的な集会、というパターンがおおむね毎晩、繰り返されるのである。

埋葬の前日は、ひときわ大がかりにヨルングの歌と踊りが繰り返され、人々も多数集まる。踊り手は念入りの身体装飾をし、「大きな」踊りが次々と披露される。遺族は客に食事をだし、儀礼は盛り上がりを見せる。この日には、夜半になってから、全ての女性と子供を家に帰し、男性だけで特別な儀礼が行われる。これは、死者の性別や年

齢にかかわらず必ず行われる重要な儀礼である。この内容は秘密であるが、棺に死者とともに埋葬するものを納め、土葬の準備をされるといわれる。また、時にはこのときに儀礼場にモルが作られることもある。いずれの行程も男性たちだけで、ほとんど夜を徹して行われる。

④ 葬儀最終日―埋葬

葬儀の最終日には棺が土葬される。朝から歌と踊りが続けられる。お昼過ぎになると町の人々もほとんどが集まり、葬儀の終了を見守る。そして、棺を運び出すための儀礼が始まる。喪がり屋の外にマットをひき、そのまわりを死者の母親と類別的母親たちが車座に囲んですわる。女性たちは、ただふつうの姿で棺をとりかこむこともあるが、上半身裸になり、クランの豊饒性や再生産を象徴する絵を胸に描いた姿で儀礼に望む場合もあり、これはいわゆる正しい「伝統的な」やり方だと彼女らはいう。伝統的なやり方をする場合と、そうでない場合は葬儀によってさまざまである。棺は、デジャリドゥーと拍子木に先導され、親族関係によってあらかじめ遺体を扱う人々と決められていた男性たちによって担がれ、喪がり屋から運び出される。この人々は死者の特定の親族関係にある人々（母方祖父の子供たち）で、前もって決められている。かれらは、「仕事を持つ人々（ジャマワツタング）」とよばれ、特別の身体装飾として両腕の肘から下を色粘土で塗る。そして葬儀中、遺体に直接かかわるような中心的な作業を全て受け持つ。重要な役割を果たす人々たちであるが、穢れた状況にあるとされ、葬儀期間中、他の人々とは直接的な接触を極力持たないように配慮される。例えば、食事でも彼らのものだけは特別に用意され、ほかの人々と共食されることはない。

棺が運び出され「母たち」の中心におかれると、女性たちは、いっせいに嘆きを始める。大きな声をあげ、身体を何度も地面にたたきつけ、石や鉄器で自分の頭や身体を殴り、激しく悲しみをあらわす。人々がそれを止めようとするので、葬儀場は喧騒に包まれる。その一方で踊りは続けられる。ここで、キリスト教的集会、牧師の祈りやゴスペル、それに合わせた踊りなどが行われる場合もある。それらが終わると、棺は再び「仕事を持つ人々」によってかつがれ、クランの歌と踊りに率いられて車に乗せられる。そして、そのままクランの歌と踊りの隊列の先導で、車はゆっくりと墓地へと進み、参列者がその後続く。

墓地にはあらかじめパワーシャベルなどで、墓穴が掘られている。そのそばに棺が下ろされ、最後の集会が行われる。これは、ヨルングの牧師が中心となる場合が多く、彼が司会をし、聖書を読み、死者と聖書に関する話、ゴスペル、ゴスペルに合わせた女性たちの振りつきの踊り、祈りなどが行われる。葬儀によっては、ここで同時にヨルングの伝統的な踊りが繰り返される場合もある。それが全て終わると、再び「仕事をもつ人々」によって棺が墓穴に下ろされ、人々が土を投げ入れ、墓穴が埋められ、造花で墓

を飾って葬儀は終了する。

翌日、葬儀場に、モルがつくられ、死者とかかわりの深い親族が一人ずつ、このなかにはいって水をかぶるといふ、清めの儀礼が行われる。モルは儀礼のリーダーによってあらかじめ合意されたデザインが作られる。特に、「仕事を持つ人々」は必ずこの儀礼によって、穢れから解放されなくてはならない。これをもって一連の葬儀は終了する。

4 考察 — ヨルングの葬儀の変化と持続

本論では、ヨルングの葬儀の変化を概観してきた。そこには社会的、物質的、経済的变化に対応する形で展開されているヨルングの人々の折衷、調整、流用などの彼らの多様なタクティクスが見られた。そのなかで特に二つのポイントを指摘することにした。一つは、大きな変化にもかかわらず維持されている彼らの精神性という論点であり、もう一つはキリスト教的要素の取り込みをはじめとする変化と、伝統性の強調という異なる二つのベクトルが共存しているという点である。

まず、一つ目の論点から考えたい。本論でみたように、現在のヨルングの葬儀には、ミッションの時代以前と比べていくつかの大きな変化が認められる。まず、埋葬の方法が変わった。以前のように、遺体を高床の小屋におき、村を離れることはなく、骨の回収と改葬も行わなくなった。ホロログという丸太の棺も使わなくなった。遺体は西洋式の棺に収められ、葬儀の終わりに土葬される。これは、ミッションの時代に始まったことで、遺体を放棄するやり方をミッションが禁止したためといわれる。遺体を置き、村を離れ、時間をおいて骨を回収し、さらに葬儀までのあいだ骨を持ち歩く、という方法は、彼らに葬儀の準備のための十分な時間を与えていた。その間、故人の母親か未亡人が喪に服しながら、骨をいれた樹皮の包みを持ち歩いた。村を離れることは、死への禁忌のためだった。それは現在では失われた慣習である。

また、キリスト教的要素が儀礼に入り込んでいることも表にみえる大きな変化である。牧師の存在や、ゴスペルの音楽にあわせた振りつきの踊り、喪がり屋の中のイエスの絵、夜になって行われるキリスト教集会などのように、ヨルングの葬儀には、多様な形でキリスト教的な新しい要素がはいりこんでいる。このように外来の要素と手順の変化に端的に見られるように、彼らの葬儀は変化してしまいつつあるように見える。

しかし、このようなヨルングの葬儀の外見の大きな変化にもかかわらず、実は深いところではその精神性は維持されていると筆者は考えている。それは二つの交渉 (negotiation) がそこにみられると考えられるからである。一つは葬儀後にみられる遺族は葬儀の終了とともに自宅を出、少なくとも数年間住居を変えるという習慣である。死者のでた住居はこわされることはなく、関係の遠い親族によって使用される。そして、遺族は同じ町の中の他の家に居をうつす。時には他の村や町に移動することもあ

る。かつての村のように、放棄することが可能な小屋ではなく、恒久的な住居に暮すようになった現在でも、遺族は必ず葬儀の後、住む場所を移すのである。この遺族が住居を離れるという行為には、かつての遺体をおいて村を離れるという慣習と共通した意味を見出すことができるだろう。それは、彼らが死者とともに暮らしていた場所をはなれるという禁忌の精神である。恒久的な建物に定住するようになった彼らは、家そのものの廃棄はできなくなり、地理的な移動とその受け入れというシステムを作り出すことによって、新たな交渉をおこなったといえるだろう。

もう一つはヨルングの人々が、現在も葬儀の準備に十分な時間をかけている点である。ヨルングの人々の間ではどんなことを決めるのにも、発言者は発言を封じられることなく、意見の違いを多数決などによって強引に集約されることもない。全員の意見がひとつの方向におのずと集約されていき、みんなが納得するまで議論が尽くされる。葬儀においては特にそうであり、そのため準備の期間は時に数カ月に及び、死者、死者とクランの関係を改めて議論し、確認する場になっている。これは以前には遺体の放棄と骨の回収という彼らに独自の手順によって可能となっていた。それが現在では、病院の遺体安置所と軽飛行機という近代装置がこのことを可能にしている。都市の病院で死亡すると、遺体は病院の遺体保管所に留められる。ガリウイックで死亡した場合は、遺体を飛行機で都市の病院に送り、やはり遺体保管所におく。そして、議論が尽くされ、すべてが決まったときになって、棺に納めた遺体は軽飛行機で町に運ばれ、そこから葬儀がスタートする。つまり、かつての慣習は失われたものの、近代的設備を利用することによって、神話と死者個人との関係を定直し直すための重要な時間は確保するというもう一つの交渉がここにあったといえる。

次に二つ目の論点を考えたい。ヨルングの現在の葬儀では、伝統的要素の強調とキリスト教的儀礼の伸張という二つのベクトルが動いている。本論で見てきたように、ヨルング社会では、キリスト教ミッションによって大きな社会経済的変化を経験した。キリスト教ミッションとアボリジニの関係は友好的で、非常に親和的であった。第2章で見たように、このことを背景とし、キリスト教にかかわる二つの大きな事件がおきた。それらの事件をへてきたことによって、キリスト教は彼らにとりもはや異質な外来のものではなく、解釈、流用が可能なものになっていたと考えることができるだろう。一つ目の事件でも彼らの論理にのっとったキリスト教の理解であったし、二つ目の事件では、その側面はさらに強まり、集会の行い方もヨルングの独自の形となっていた。このようにヨルングの人々にとって1970年代までにはキリスト教は操作可能なものとなっていたといえる。そして、そのような経緯を背景として、キリスト教的要素は彼らの葬儀に自在に取り込まれることが可能になったのではないだろうか。つまり、葬儀に見られる変化は、外来のキリスト教的要素が、彼らにとってすでに「外来の」ものではなく、儀礼に取り込むことの可能な、自分たちのものになっていることを示しているのだら

う。現在の葬儀に取り込まれ、流用され、折衷され、捨象されているのは、キリスト教的要素のみとは限らない。葬儀の細かな内容や使われている物、踊り、音楽などをみていくと、それ以外の多彩な外来のもの流入があることがわかる。そしてまた、それと同時に、改めて彼らの伝統性も強調されている場面も頻出し、伝統性へのベクトルも同時に存在していた。「伝統的」と彼らが認知する踊りや装飾などが幾度も現れ、そうした場面も選択的に増えている。このように筆者がみたのは、多様な要素を主体的に取り込んで葬儀を作り上げている姿であった。

ヨルングの人々は、現在、大人数で町に住み、近代的旅客手段によって遠距離移動が可能になり、通信網によって外部社会とも密につながるようになった。そのなかで、葬儀の具体的な手順は大きく変わったように見えるものの、かつての、死者とともに暮らした村を捨てるという土地と死に関する禁忌と、葬儀までの長い期間を喪とし、その期間を準備にあて、あわせてクラン間の関係や死者の社会的神話的な位置の定位をおこなうという、死と葬儀をめぐる基本的な対応を維持していた。このように、外来要素の取り込みにもかかわらず、彼らの葬儀にかかわる精神性は維持されていることが指摘できる。そして、儀礼の要素が多様に、選択的に、自在に作り上げられていることによっても、死とクランをめぐる彼らの精神性をゆるがすことのない葬儀の構造を維持することを可能にしているのだとみることができる。言い換えれば、彼らにとって中核的に重要な部分は維持したまま、変更可能な部分を融通無碍に変化させているともいえるのである。現代的な町で、コンクリート製の住居に暮すなかで、近代的装置を利用し、可能な手段を選択しつつ、彼らは現実的な折衷をおこない、死者との精神的な関係をきわめて彼ら独自に維持しているのである。

ヨルングの人々は、死を契機として、葬儀という機会をとらまえて、自己のクランとの関係を確認し強める機会としているように思われる。彼らにとって死とは、クランと自己との関係を完結させるために必須のものと考えられているようである。彼らの葬儀に対する、筆者には異様にも見える熱の入れ方と、強固な精神性の維持はそのことを示しているのかもしれない。本稿では紙幅の制限から十分に論じられなかったが、葬儀におけるキリスト教的要素やその他の要素のはいりこみ方の多様さについては、彼らの文化的タクティクスを理解するうえでも、注目が必要であると考えている。キリスト教的なものが非常に大きくとりあげられる場合も、そうでない場合もあり、ある葬儀では伝統的な踊りや、やり方が強調されていたような場面に、別の葬儀ではキリスト教が大きく幅を利かせていることも珍しくない。空間的、時間的にも双方の要素が入り混じっている場合も多い。キリスト教以外の外来の要素が入り込んでいる場合もある。反対に、母方祖母クランによる神話的シンボルや踊りの授与などのクラン間関係の強調、「大きな」踊りのクラン間での交換、死者の「母」たちの身体装飾、などのように、ヨルングのクランやクラン間関係の主張が非常に強く現れる場合もある。キリスト教的要素が葬

儀に混在するあり方には、必ずしも決まった形があるのではなく、儀礼による変異が大きいのである。葬儀にキリスト教的要素を取り入れ、改変し、整除し、旧来の「持続的」諸要素と折衷したり接合したりする、ヨルングの人たちが実践する文化的タクティクスの多様さからは、多くのことが読み取れそうである。このことについては、稿をあらためて、詳細に事例を提示して分析することによって綿密に論じたいと考えている。

文 献

Berndt, Ronald

1962 An Adjustment Movement in Arnhem Land, *Cahiers de L'Homme*, Mouton & Co.
Blacket, John

1997 *Fire in the Outback*, Albatross Books.

Bos, Robert

1988a *Jesus and the Dreaming – Religion and Social Change in Arnhem Land*, PhD Thesis submitted at University of Queensland.

1988b The Dreaming and Social Change in Arnhem Land, In Swain, T. & D. Rose eds. *Aboriginal Australians and Christian Missions*. The Australian Association for the Study of Religions.

Dewar, Mickey

1995 *The 'Black War' in Arnhem Land – Missionaries and the Yolngu 1908-1940*, The Australian National University, North Australia Research Unit.

Fidock, Alan ed.

1982 *Introducing Aboriginal Australians*, The Curriculum Development Centre.

Harris, J.

1990 *One Blood: 200 years of Aboriginal Encounter with Christianity*, Albatross Books.

Keen, I.

1994 *Knowledge and Secrecy in an Aboriginal Religion*, Oxford University Press, New York.

McKenzie, Maisie

1976 *Mission to Arnhem Land* Rigby, Sydney.

Shepardson, Ella

1982 *Half a Century in Arnhem Land*, PanPrint.

Warner, W. L.

1989 (1958) *A Black Civilization: A Social Study of an Australian Tribe*, Harper & Row, Publishers, Inc.

窪田幸子

2000 「オーストラリア・アボリジニとキリスト教ミッションの半世紀——北東アーネムランド、ヨルングの記憶」吉岡政徳・林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究』国立民族学博物館研究報告別冊21号, pp. 87-108, 国立民族学博物館。

2002a 「ミッションの遺産——ポストコロニアル状況に見るキリスト教」杉本良男編『二〇世紀

における諸民族文化の伝統と変容7 宗教と文明化』pp. 122-142, ドメス出版。

2002b 「ジェンダーとミッション—オーストラリアにおける植民地経験」山路勝彦・田中雅一
編『植民地主義と人類学』pp. 239-26, 関西学院大学出版会。

杉藤重信

1990 「1パーセントの人々—アボリジニ・長老ブルマラの世界」中野不二男編『もっと知り
たいオーストラリア』pp. 82-94, 弘文堂。